

## 鹿児島の昆虫 59

## 口永良部島の昆虫

昆虫担当 金井 賢一

## 調査がまだまだ足りない島

口永良部島に行くには、一般に屋久島からフェリーで渡るしかありません。そのフェリーも一日一往復しかないために、十分な日程を確保しなければ調査ができない地域です。そのため、口永良部島の昆虫に関する調査は、屋久島や種子島などに比べても遅れています。2016 年、博物館では口永良部島を 3 回調査しました。様々な時期を調査したことは今までになく、新記録種も多数確認されました。



ヘリポートに遊ぶヤクシカ



二次林内

口永良部島はリュウキュウチクの広がる平地や道路沿い、スタジイなどの二次林と多様な環境があり、それぞれの環境に適応した昆虫が生息していると考えられます。しかし、屋久島などに比べて面積が小さい分、環境の多様性も低いと考えられ、生息する昆虫の種数も少ないことが予想されます。本当にそうなのか、確かめるためにも調査が必要です。

## 新記録種続々！

採集した昆虫を過去の記録と比較してみると、今まで記録のなかった種がたくさんいました。甲虫類や蛾類など、種数のもともと多いものは新記録がたくさん出ると予想していましたが、トゲナナフシやヒサゴクサキリなどの直翅類でも、新記録種が得られました。調査が進んでいるチョウについても、スジグロシロチョウが新記録種として見つかりました。今後も調査を継続すれば、さらに新しい発見があるでしょう。



オキナワイチモンジハムシ



スジグロシロチョウ

## 火砕流跡地のアリ

2016 年 5 月 28 日に発生した火砕流は、向江浜まで達しました。この火砕流跡地では昆虫がいなくなり、その後どのような虫たちが侵入してくるのかを明らかにしたいと、屋久島町に許可をもらって調査しました。



火砕流跡地

ところが、この火砕流の跡地でもアリはしたたかに生きのびていました。オオズアリが砂糖水に集まった際に、大型働きアリがたくさんやってきました。この大型働きアリは、女王アリが巣を作り始めてから 1 年間では、このように多く見られません。100℃から 400℃と、比較的低温な火砕流だったために、



土中にあったアリの巣は全滅を免れ、火砕流跡地で懸命に巣を維持していたのでしよう。

## オオズアリの大型働きアリ

では、どのようなアリが生き残ったのでしょうか？噴火前には、森林の中に道路があり、森林性のアリと荒地地性のアリとがいたと思われます。その後、火砕流によって森林が失われると、オオズアリなどの荒地地性を好むアリがその生息場所を広げたと思われます。

しかし、植物が少ない場所ではエサもおそらく少ないはずで、懸命に生きのびたアリたちですが、その生活は豊かとはほど遠い、非常に厳しい状況と考えられます。

